



○ 青空文庫とは？

著作権が消滅した作品や著者が許諾した作品のテキストを公開しているインターネット上の電子図書館です。15,000件以上の利用可能なテキストがありますが、収集条件の性質上、執筆年代が古く、中高生には中々馴染みのない作家や作品が大半だと思います。

今①、そんな膨大なテキストの中から、「独断」と「偏見」で”掘り出し物”知られざる名作・傑作”を **テーマ毎に**、ご紹介していきたいと思います。

紹介基準 ① 読みやすい短編 ② ええ草紙人気作品100位以内に入っていない作品
③ 何より自分が読んで面白かったもの（←+→）

○ 目次① [目次②](#) ↓

① [お役立ちHP](#) ※知っていると便利な青空文庫関連のHP紹介



② テーマ：[「おとこ同士」](#)

一口に「友情」というには、あまりにほろ苦く、暗い部分も多い関係性なので、このテーマタイトルにしました。男と男の間には、互いの矜持と矜持のぶつかり合い、真っ向から対峙する「戦い」の場もあれば無私な奉仕・互いへの深い尊敬もあります。どちらにしても「ああ、男っていいよね」と思えること請け合いの2作品です。是非ご一読を。



[久生十蘭](#) 『[ハムレット](#)』

終戦から数年、高原の避暑地に現れた風変わりな銀髪の老人。人品卑しからず、見るからに高貴で精神性を感じさせる面立ち、だが時に時代離れ、日本離れし過ぎているその態度に、周りの人々は困惑し、好奇心を募らせていった。そんなある日、常にその老人につきそう憂鬱な眼差しの青年が人々の求めにこたえて、その老人の数奇な運命にいて話し始めた…。

[山本周五郎](#) 『[泥棒と若殿](#)』

[※ その他の久生十蘭のおすすめ](#)

廃屋のような屋敷に孤独に住む若殿様のところに泥棒が入ります。泥棒はいろいろ家探しをしますが結局金目のものは見つからず挙句の果てに床板を踏み外す。あきらめて家を出ようとした泥棒でしたが食べるものもなく、ただ横になっている若殿に興味を持ちます。「そんなんじやしょうがねえじやねーか」いつの間にか二人の奇妙な共同生活が始まります。

[※ その他の山本周五郎のおすすめ](#)

③ テーマ：「不思議な話」

「不思議」…そうであることの原因がよくわからず、なぜだろうと考えさせられること、そういう事柄を意味する言葉。不思議にも色々な不思議があるが、ここでは“人のこころの”不思議をとりあげた作品を紹介する。かたや人の謎の死にまつわる物語、もう一方は人の心の淀みが見える少女の物語。どうすることも出来ない人の業や憧れ、狂気を垣間見させてくれる小品、是非ご一読を。

[梶井基次郎](#) 『[Kの昇天](#)』

一人の青年の唐突な死。遺書も動機も無いその死に周り中が自殺か他殺か首を捻っていた。そんな際、彼の友人の一人が話す、「彼は月に魅入られたのだ」と、それはどういう意味なのか。」月狂(ルナティック)という言葉が称揚された大正・昭和初期の雰囲気の色濃く伝える作品。



[※ その他の梶井基次郎のおすすめ](#)

[夢野久作](#) 『[人の顔](#)』

「千エ子は奇妙な児であった。…それは何の影もない大空と屋根との境い目だの、木の幹の一部だの、室へやの隅っこだのを、ジイッと、いつまでもいつまでも見つめる癖で、すぐ近くから呼ばれているのに気がつかないで、空のまん中に浮いている雲だの、汚れた白壁の途中だのを一心に見上げていたりするのであった。」…久作にしては、さらっと読める好短編。千エ子の儚さが印象的だ。

[※ その他の夢野久作のおすすめ](#)



④ テーマ：「無頼派のふたりの“太宰”と“安吾”」

無頼派の二人、太宰治と坂口安吾。両人とも大半の作品を青空文庫で読むことが出来ます。太宰と言えば「走れメロス」「人間失格」

「斜陽」、安吾と言えば何と言っても「墮落論」、教科書にも掲載され、他の日本の文豪よりよっぽど有名な二人ですが、それでも意外と他の作品は知られていないようです。ここでは彼らの埋もれた短編を紹介します。無頼派の意外な一面を堪能してみてください。

[太宰治](#) 『[I can speak](#)』

「くるしきは、忍従の夜。あきらめの朝。この世とは、あきらめの努めか。わびしさの堪えか。わかさ、かくて、日に虫食われゆき、仕合せも、陋巷の内に、見つけし、となむ。」掌編。太宰作品の冒頭(つかみ)とラスト(下り)のうまさは一品！ この作品もその例にもれません。

[※ その他の太宰治のおすすめ](#)

[坂口安吾](#) 『[文学のふるさと](#)』

「シャルル・ペロオの童話に「赤頭巾」という名高い話があります。既に御存じとは思いますが、荒筋を申し上げますと、赤い頭巾をかぶっているのが赤頭巾と呼ばれていた可愛い少女が、いつものように森のお婆さんを訪ねて行くと、狼がお婆さんに化けていて、赤頭巾をムシャムシャ食べてしまった、という話であります。まったく、ただ、それだけの話であります。」太宰と違い「突き放す」感が心地良い安吾の短評。一読、清々しい気持ちになれます。ちょっと物悲しいですが。

[※ その他の坂口安吾のおすすめ](#)



① お役立ちHP

- ※ 現在、今すぐ活用できるHPです。
これから参考になるものを順次報告していきます。

[目次① ↑](#)

その1 ブンゴウサーチ

ブンゴウサーチ

青空文庫で公開されている作品を読了時間で検索できるサービス。
「次の駅まで15分以内に」というような際、便利。

その2 えあ草紙・青空図書館



縦書きビューワーえあ草紙を利用した青空文庫専用ネット図書館。
スマホ・タブレットで読むとき紙の本感覚で読めて便利。
また「青空文庫の人気作品」というページには、**毎月5日目のアクセスランキング**が見られて、今どんな小説が読まれているかわかり、参考になる。

その3 青空朗読



青空朗読

プロのアナウンサーによる社会貢献活動としてスタートしたHP。
最近では、朗読を学ぶ一般の方々からも作品を提供している。
(朗読作品590件)
※ 朗読についてはまだ調査中。

[目次① ↑](#)

○ 久生十蘭 「これは読んでけ おすすめ本」



男のダンディズム(それも、負けている側の)溢れる作品たち。今時の軟弱な「成長物語」や「成功物語」とは違う、ほろ苦い、大人の物語を是非味わって欲しい。人生、負けたほうにも境地があり、ブライトがある。男の矜持、痩せ我慢のカッコよさを是非、堪能してみよう。

「黒い手帳」

「黒いモロッコ皮の表紙をつけた一冊の手帳が薄命なようすで机の上に載っている…」
 巴里の最下層のアパートにて、賭博の必勝法をめぐる男女三人の愛憎物語。物語の報告者の最後の一言に、葉(おとこ)を感じて欲しい。今はなかなかこんな風には書けない。

「黄泉から」

「九時二十分……」新橋のホームで、魚返光太郎が腕時計を見ながらつぶやいた。
 戦中、南方で病没した従妹。恩師に彼女の想いを聞かされ、新盆の真似事をしていると、彼女の最後の様子を知らせに戦友が主人公の元を訪ねてくる…。こちらも最後のセリフがいい。男の痩せ我慢、気取ったポーズを堪能して欲しい。

「黎氏の友情」

「山川石亭先生が、蒼(あお)い顔をして入って来た。…」全二作に比べて、打って変わった大人のコメディを。1911の貧民街近くに住む篤実の日本の老学者に降りかかる災難。その裏に隠された男の敬愛と友情。石亭先生の男のバカさ加減がまた、その友情の純粋性を感じさせてくれる。石亭先生みたいな奴っているよね(笑)

目次① ↑

○ 山本周五郎 「これは読んでけ おすすめ本」



‘18年にようやく制限が解除され、徐々に収録作が増えている周五郎作品。
 「鬚を乗せた現代小説」とも称されるその作品は、時代小説の皮を被っているが人生の機微を感じさせ、未だに色褪せない。しかも物語として最高に面白い！
 未だ少ない収録作品から読みやすいものを中心に選んでみました。

「ひと殺し」

「双子六兵衛は臆病者といわれていた。」
 臆病者で評判の若侍は、如何にして御用討ちを成功させたのか、その顛末。周五郎はこういった小品の「こっけい物」と呼ばれるユーモア小説がいい。青空文庫にはまだまだ数が少ないが、そのうちの一編。なんていうのか、周五郎のこの手の作品を読んでいると心温まり、元気になれる。人生、そう捨てたものじゃない。

「雨あがる」

「もういちど悲鳴のような声をあげて、それから女の喚きだすのが聞えた。」貧民宿に泊まった浪人夫婦。底抜けにお人好しだが、腕の立つ主人とその妻。お人好し故に誤解され、誤解して、周りに騒動が持ち上がる。でも、その純情ぶりがすがすがしい。こんな人がいてくれたらなあ、こんな人生があってもいいじゃないか！同名で近年映画化もされた名品。

「日本婦道記
小指」

「今日は、そんなものを着てゆくのか」「はい」小間使の八重は、熨斗目麻袴を取り出していた。」周五郎の代表作の連作短編から。とは言え、現代では旧弊、男女差別とか「時代性に鑑み…」と言われてしまうシリーズ。でもこれは男女間でのメルヘンだと思って欲しい。好きな人を好き、と言えなかった時代の。女子には受けないかも知れないなあ。

○ 梶井基次郎 「これは読んでけ おススメ本」

実は、あんまり読んでないのので、代表作二つを紹介。どちらも冒頭の文章の読者を引き付ける力はおごい！是非圧巻の文章を堪能して下さい。

※ ごめんなさい、両方とも「ベスト100」には行ってました。(5/12)



「檸檬」

「えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧おさえつけていた。焦躁しょうそうと言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿酔ふつかよひがあるように、酒を毎日飲んでいると

宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した肺尖カタルはいせんや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなかった。」

「桜の樹の下には」

「桜の樹の下には屍体しかばねしたいが埋まっている！

これは信じていいことなんだよ。何故なぞって、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじゃないか。俺はあの美しさが信じられないので、この二三日不安だった。しかしいま、やっとわかるときが来た。桜の樹の下には屍体が埋まっている。これは信じていいことだ。」

目次② ↑



○ 夢野久作 「これは読んでけ おススメ本」

青空文庫は久作の作品をほぼ全て収録しています。(「ドグラマグラ」も「少女地獄」もあるし、無いのは「犬神博士」くらい)ただ久作は探偵小説家の他に”新聞記者”児童文学者”能楽師”などの顔もあり、その著作も一同に収録されているので、中々目当ての作品が決められないです。なのでここでは、久作初心者に向けて作品を挙げてみます。

「鉄鎚」

「—ホントウの悪魔というものはこの世界に居るものか居ないものか—

—居るとすればその悪魔は、どのような姿をしてドンナ処に潜み隠れているものなのか—

—その悪魔はソモソモ如何なる因縁によって胎生しつつ、どのような栄養物を摂って生長して

行くものなのか— —その害悪と冷笑とを逞ましくし行く手段は如何—」中 2 病感、満載(笑)の主人公。でもこれはこれで良し！久作お得意の独白体だが、これは読みやすいほう。

「空を飛ぶ
パラソル」

「水蒸気を一パイに含んだ梅雨晴れの空から、白い眩しい太陽が、パッと照り落ちて来る朝であった。ちょうど農繁期で、地方新聞の読者がズンズン減って行くばかりでなく、新聞記事だねの夏枯れ季節ときに入りかけた時分なので、私のいる福岡時報は勿論のこと、その他の各社とも何かしら読者を惹き付ける大記事は無い(中略)と鶴の目鷹の目になっていた。」悪夢の幻影がちらつく連作短編。表題通りの光景が目浮かぶ。

「あやかしの鼓」

「私は嬉しい。「あやかしの鼓」の由来を書いていい時機が来たから……」久作のデビュー作。鼓にまつわる不可思議な因縁を通して起きた連続殺人事件。その真相を犯人が独白する体裁。処女作ということもあり、ややご都合主義的な展開と思われふしもあるが、それでも読んでいてくらくらしてきて、流石「ドグラマグラ」の作者と思わせる。この作品で「健康的過ぎて不健康」というイメージをはじめて知った。

「いなかの事件」

「村長さんの処の米倉から、白米を四俵盗んで行ったものがある。あくる朝早く駐在の巡査おまわりさんが来て調べたら、俵たわらを積んで行ったらしい車の輪のあとが、雨あがりの土にハッキリついてた。…」十ンセンス風味の連作短編。連載だったのが、評判が良くて後半から話が長くなっている。当時の田舎の土俗的な雰囲気や土俗の怪作。この辺りが”異端”と呼ばれる所以か？好き嫌いが分かれるところ。

○ 太宰治 「これは読んでけ おすすめ本」

わざと、代表作・名作は、はずします(笑) 初期と晩年の重くつらい作品もはずします(笑) 中期の健全な(ちょっと甘めな)作品か、短編を紹介していきます、太宰はこんなに読みやすい、わかりやすいんだよ。恐れず、読み飛ばしてみよう
※「[葉桜と魔笛](#)」は人気ベスト100に入っているのでわざと抜かしました。



「ア、秋」

「本職の詩人ともなれば、いつどんな注文があるか、わからないから、常に詩材の準備をして置くのである。「秋について」という注文が来れば、よし来た、と「ア」の部の引き出しを開いて、愛、青、赤、アキ、いろいろのノオトがあって、そのうちの、あきの部のノオトを選び出し、落ちついてそのノオトを調べるのである。」自分の創作ノートから引き写す体で、秋に関する言葉やイメージを羅列していく、センスが光る掌編。でも詩人というのはおんまり似合わないなあ、太宰には。

「愛と美

について」

「兄妹、五人あって、みんなロマンスが好きだった。…父は、五年まえに死んでいる。けれども、くらしの不安はない。要するに、いい家庭だ。ときどき皆、一緒におそろしく退屈することがあるので、これには閉口である。」五人兄妹と母親の休日のスナップ。即興の物語に兄妹の性格が表れる。続編の「[ろまん灯籠](#)」もオススメ。解説では「太宰の夢見た家族か？」とあるけど(於:新潮文庫)それは如何なものか。教養や文化的な生活への憧れは当時の時代性を感じる。

「花燭」

「祝言の夜ふけ、新郎と新婦が将来のことを語り合っていたら、部屋の襖のそとでさらさら音がした。…私がこれから物語ろうと思ういきさつの男女も、このような微笑の初夜を得るように、私は表から祈っている。」甘いメルヘン。人生の敗残者になってしまった「男爵」と呼ばれる若者と元その生家の女中だった女優「とみ」、二人のロマンス。甘々な作品なのだけど、それはそれで許しておいて欲しい。たまにはこんなご都合主義もいいじゃないか！

[目次②](#) ↑



○ 坂口安吾 「これは読んでけ おすすめ本」

安吾は太宰の解毒薬として読んでいました。太宰を読んで、“自虐”と“自意識過剰”でくたくたになったところで安吾を読むと気持ちが一気に楽になります。
「なんだそんなこと、バカバカしい。死ぬことなんてくだらない、生きることが全てなんだ。」安吾を読むと人生を奮い立たせてくれます。負けるな！ 戦え！

「暗い青春」

「まったく暗い家だった。いつも陽当りがいくせに。どうして、あんなに暗かったのだらう。それは芥川龍之介の家であつた。私があの家へ行くやうになったのは、ある日の自殺後二三年すぎたが、ある日の苦悶がまだしみついてゐるやうに暗かつた。私はいつもその暗さを呪ひ、死を蔑み、そして、ある日を憎んでゐた。」自伝的エッセイのひとつ。20代の同人時代の交友と生活を語りながら、「青春」について語っています。「私たちの青春だから暗いのではない。青春は暗いものだ」「君は虚無だよ」印象的な文句もたくさん。また安吾にはそのものずばり「[青春論](#)」という著作もある。これもオススメ！特に冒頭の「不良中年」「不良老年」のくだりは、今読むと涙ぐみます。

太宰の情死直後に書かれた太宰論。多分これ以上短く的確な評論は無いと思う。

「不良少年と キリスト」

「太宰は、M・C、マイ・コメジアン、を自称しながら、どうしても、コメジアンになりきることが、できなかった。」「自殺は、学問じゃないよ。子供の遊びです。はじめから、まず、限度を知っていることが、必要なのだ。私はこの戦争のおかげで、原子バクダンは学問じゃない、子供の遊びは学問じゃない、戦争も学問じゃない、ということを教えられた。大げさなものを、買いかぶっていたのだ。学問は、限度の発見だ。私は、そのために戦う。」…今読んで、こころ震えます。